

かけはし～世界陸上東京大会から考えよう～第67号

9月13日から21日まで東京で世界陸上が行われました。日本選手の活躍も含め、0.01秒に1cmに懸けて練習を積み重ねてきた選手の笑顔や涙に一喜一憂された方は少なくないのではないのでしょうか。



この大会には聴覚に障がいのある湯上剛輝選手が円盤投げに出場しました。日本デフ陸上協会によると、日本のデフ選手が健常者の世界選手権に出場したのは初めてだそうです。湯上さんは「夢のような時間だった」と大会を楽しまれたようです。そして、湯上選手が試技に入るとき、観客席からは手話の応援があったそうで、多様性豊かな社会になってきたと感じました。

しかし、難しい課題もありました。陸上競技では男女差があることは記録を見れば一目瞭然です。競技の公平性を確保する観点から、世界陸連は女子選手への遺伝子検査を実施しました。世界選手権など世界大会に出場するためには義務となっていることもあり、東京大会に出場した女子選手の検査実施率は100%でした。同じスポーツの大会であってもオリンピックは96年のアトランタオリンピックまで約30年間続いた性別確認検査を2000年のシドニーオリンピックまでに廃止しており、対応が分かれています。

遺伝子検査の精度向上は医学の進歩を意味し命を救うことにつながっていますが、出生前診断が命の選別につながる可能性があるなどの課題も指摘されています。また、フランスのように医療目的外の遺伝子利用を明確に禁止している国もあります。さらに、中央大学の來田（らいた）享子教授は「これまで信じてきた自分のあり方を覆すような結果が出てくる可能性があり、『ああそうなんですか』と簡単にやれる検査ではない。遺伝子を扱うことで対象選手だけでなく、選手の家族、次の世代の人権も侵害される危険性もある。」と遺伝子検査による個人の知らないでいる権利を侵害してしまう危険性などについて指摘しておられます。

一方で2024年パリオリンピックのボクシング女子66kg級でアルジェリアのヘリフ選手と対戦したイタリアのカリニ選手が46秒で棄権しました。ヘリフ選手は2023年の世界選手権での性別検査で、男性ホルモンのテストステロンの値が基準より高く決勝戦への出場権を剥奪されていました。試合後カリニ選手は「これほど強いパンチを受けたことがなかった。健康のためにやめることにした。」と語られました。

競技の公平性も大切ですし、選手一人ひとりの様々な権利を守ることも大切です。ただ、検査をすることは、決めつけてはいけません。トランスジェンダー女性や性分化疾患（内性器・外性器が先天的に通常と異なる状態）の方など検査をクリアできない人の犠牲のもとに成り立っているとも言えます。もし、トランスジェンダー女性が入院する際女性の部屋を希望したとします。どのように対応するべきでしょうか。「正解はない。ただ、一人の患者さんと見ることが大切。」と相談支援センター虹愛（にこら）の田崎智咲斗さんは教えてください。IOCと世界陸連の対応が分かれていることから、この課題の正解を今すぐ出すことはできませんが、手話での応援など社会は多様性を尊重する方向に向いていると感じます。競技の公平性を確保し、選手一人ひとりが大切に守られる制度設計につながることを願います。 人権・地域教育課